

春満と真淵の実景説

郷津 正

はじめに

真淵は『万葉考』総論部、「万葉集大考」のなかで、万葉研究史を振り返って次のように述べている。

後の世に此集の哥を解なんとせし人々有しかど、古に
しことはいとはやき代より失はれにたれば、今はかた
きともかたきわざ也。近き年ごろ撰津の契沖僧、山城
の荷田大人こそ、同じ時に在て相問はぬものから、同
じこゝろをおこして古へぶりを唱へたりき。(中略)
大人は哥のみかは、ふりぬるち々の書どもをあらすき
かへせしいたづきのかひさはなれど、まだ茹をさめは
てざるにやまひにふしつ。

万葉研究を志したものは藤原定家や仙覚など、過去にもい

たが、古代のことを明らかにすることは難しいことであつた。それが最近になつて契沖や春満が現われ、再び万葉研究は前進しはじめた。ここで真淵は、春満を契沖と並んで近年の万葉研究の基礎を築いた人物として挙げ、また『万葉集』のみならず、『古事記』『日本書紀』などの研究についての功績を讃えている。また真淵は、

惣て師は皇朝の学の大家故に物ごとにくはしく解しる
す事はいとまなくてやみつるを、古書の大意を見るこ
と今までの世、にたぐふ人は見えざるなり。

(『龍のきみへ賀茂真淵 問ひ答へ』)

と述べたり、『万葉考』卷一(一)・一番歌の頭注で、

右四句の事(籠毛與 美籠母乳 布久思毛與
美夫君志持)は荷田大人(東麻呂)のよみ初めたるなり。

かくしも上つ代のこゝろ・ことばに通じたり。

* ○ 内引用者注

と一番歌冒頭四句の訓について春満が新訓を出したことを讃えて、このような訓を導き出すことは、上代の心と言葉に通じた結果であると言っている。

しかし、このような真淵の春満顕彰の言葉に反して、

恐らく万葉註釈書の中最も新説の多いのは春満の註釈であらうと思はれる。契沖、真淵、守部の如き比較的
独創の豊かな学者と比しても、春満は決して劣らないのである。併しその独創が確実な文献に基づいてたてられたのではなくして多少牽強附会の説の多い事もい
なむ事の出来ない点であらう。

② 『校本万葉集』首巻 「万葉集註釈書の研究」久松潜一氏担当

独自の見解が多く、よるべき新見もあるが、一方で無
理な付訓などもめだつ。

③ 『別冊国文学 万葉集事典』「万葉集の注釈」身崎寿氏担当

というように、現代の万葉研究者から、春満は決して高く
評価されていない。だが大久保正氏は、真淵と春満の本文
批評や付訓、語釈などの態度・方法を比較して、

春満の万葉研究は未だ学問として純化徹底を欠く雑駁
なものであったが、しかもこの中にふくまれてゐる示
唆を鋭く捉え、これを発展させたと思われるものが、
真淵の万葉研究には極めて多くふくまれてゐるのであ
る。真淵の万葉研究を生み出す大きな原動力の一つと
なった点において、春満の万葉研究史上における意義
は決して軽視し得ないものがあると言わなくてはなら
ない。

④ と述べている。真淵は師である春満から何を学んだのか。
本稿では、この大久保正らの指摘を受けながら、二人の実
景説に注目し、真淵は春満の万葉学をどのように受け継ぎ、
また発展させたのかを考察する。

一

まずは春満の万葉歌の解釈を見ていきたい。春満の万葉
学について、三宅清氏は、

春満が後世の心にもあらぬ実なき歌詠の伝統の中にあ
つて、「まこと」を古歌の内容の特質として推奨した事
は確かに注目に値すべきである。古代和歌に「まこと」
を強調した真淵の精神はここに前への連鎖を見出す事
ができるのである。

と述べている。⁽⁵⁾ 春満が古代和歌を「まこと」という言葉をもつて捉えようとした例として三宅氏が挙げるのは、卷一・二番歌、舒明天皇が香久山に登って詠んだ国見歌である。本文を春満の万葉集注釈書である『万葉集僻案抄』(以下、『僻案抄』)の訓に従って引用する。

天皇登香具山望国之時御製歌

大和には 群山ありと とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 加万目立ち立つ おもしろき国ぞ 秋津島 大和の国は

春満の解釈によれば、「群山」は山々の意。「とりよろふ」については、「たよると云ふがごとし」と述べている。国見をするたよりに、の意。「煙立ち立つ」は、民の家の竈から煙が立ち上っている様子。「かまめ」は鴟のこと。一首を春満の解釈に沿って訳せば、大和には多くの山々があるというので、それを見る頼りに天の香具山に登り立ち、国見をすると、広大な陸地からは煙が立ち上り、大きな池から鴟が飛び立っている。すばらしい国だ、秋津島、大和の国は、の意。この歌における春満の解釈について三宅氏は、

〔海原は かまめ立ち立つ〕の句は〕単に歌のならひとして見えもせぬ海原を見えるやうに詠み、ゐもせぬ水鳥

をゐるやうに景物的に詠ませられたのではなく、事実海原に水鳥の立つ実景を御製遊ばしたのである。

* ○ 内引用者注

と春満の説をまとめているが、⁽⁷⁾ここでは春満に先行する諸注と比較しながら、三宅氏の言葉を再確認したい。

この長歌の第九・十句目、「海原は かまめ立ち立つ」の解釈において、春満は新説を立てている。まずは『僻案抄』における春満の議論をみていきたい。

海原波加万目立多都 これを或問云。此海原心得がたし。大和は本より海なき国なり。もし天のかぐ山高山なれば、摂津国などの海を見給へるにや。たとひ海はみゆるとも、鴟のたちたつさまいかで見ゆべき。一説に、天皇は日本の主にてましますから、海内も掌の中にして、鴟は海に有物なれば、煙などの対により給へりといへり。此説しかるべき歟。

春満が挙げた「一説」とは『宗祇抄』にみえる

海原とは大和より海のみゆべきならねど、日本のあるじにてまします間、海内も心の中にして、鴟は海にたつ物なれば、煙などに対して読給へる也。

という解釈のこと。『宗祇抄』は、香久山から海が望みうるはずはないが、舒明天皇は日本の主であるから、陸だけ

ではなく海までも心のうちにはあり、陸地の煙に対して海の鷗を詠んだのであろう、とこの句について解釈している。香具山から海は見えないが文飾として海を詠み込んだ、という『宗祇抄』の文飾説は、北村季吟の『万葉拾穂抄』にほぼそのままの形で引用されている。契沖は『万葉代匠記』（以下、『代匠記』）初稿本で、「かの山のいたゞきよりは、なにはのかたまでみゆるにや、さらでも興によみたまへるか」と香具山から海が見えるのであろうか、さもなくば興を添えるため、つまり文飾として詠んだのかと述べ、文飾説も否定することはなく、解釈の可能性の一つとしては認めている。

そのような『宗祇抄』の意見に対し春満は次のように反論している。

答云 しからず。いにしへの歌は皆実のみにて、少も虚はなし。今の世の歌に見もせぬさかひをよみ、ありもせぬ景物をよむ類にはあらず。ことに天皇の国見は、一国の盛衰をもしろしめすべきたすけにもなし給ふべきに、みえもせぬ海原を見ゆるさまによみなし給ひ、在もせぬ水鳥を在如に詠なし給ひて、おもしろき国ぞとはいかでの給ふべき。此集の全篇にわたらぬ人の説なるべし。

古代の歌は全て真実を歌ったものであって、嘘や偽りを詠むものはない。特に天皇の国見というのは、一国の盛衰を知るためにするはずのものであるのだから、見えもしない景を詠み込んで何の意味があるうかと、春満は反論している。

さらに春満は続けて次のように述べている。

此海原は大池を海原とよみ給へり。いにしへは池をも海と歌にはよめり。柿本人麻呂も、あら山中に海をなすかもとよめるは獵路の池のこと也。此集卷の第三にみへたり。且天のかぐ山に大池有ことも、此集第三卷に、鴨君足人の香具山の歌あるを見てしるべし。

ここでいう海原とは、海ではなく大池のことだという。春満が証歌として挙げたものは次の二首。まずは卷三・二四一番歌、柿本人麻呂歌について春満の『万葉集童子問』（以下『童子問』）から引用する。

長皇子遊獵路池之時柿本朝臣磨作歌一首并短歌

皇は すべらし 神にしませば 真木の立つ 荒山中に 海を
なすかも

春満の注に沿って一首を訳せば、天皇は神にてあらせられるので、木が生い茂った荒野の中に大きな池を作ったことよ、の意。『童子問』のなかで春満は「池を海ともいふべ

き証ありや」という問いに対して、そのような例は「和漢共にいかほどもあり」と述べている。次に鴨君足人の作かものきみのたぢひとというのは、卷三・二五七番歌のこと。同じく春満の『童子問』から引用する。

天降りつく 天の香具山 霞立つ 春に至れば 松風
に 池波立ちて 桜花 梢盛りに 奥辺には 鴨妻かもめ
喚よほひて …

「奥辺」の語について春満は「奥の方といふ義なり」と注し、その上で「香山の池甚大なるが故に奥も辺もよめるなり。常の小池には奥辺をよむべきことにあらず」と述べている。二番歌では「かまめ」と付訓されていたものが、ここでは「かもめ」とあり語形が異なっているが、春満は『僻案抄』二番歌の注で、「加万目とは水鳥の名、鷗也。五音通じてかもめともかまめとも云」と述べ、「かもめ」「かまめ」どちらとも鷗のことを指すとしている。春満はこの二首から、古代では大池をも海と言ったこと、また香久山の付近に大きな池があったことを述べ、「海原は 鷗立ち立つ」の「海原」とは香久山付近にあった池のことを指すのだという。

『僻案抄』の議論に戻る。続いて春満は、

又問云。しからば此海原は大池なるべし。猶疑しきは鷗也。鷗は海にのみありて、池にはすまぬ鳥ならずや。

但此御歌のかまめは、水鳥の惣名にのみ給へるにや。という鷗は海に棲む鳥ではないかという疑問に対して、次のように反論している。

答云。しからず。香具山の池には鷗すめり。其証はか
の足人の香具山の歌に、奥辺にはかもめ喚と有を見て
もしるべし。

先の鴨君足人の長歌に「奥辺には 鴨妻呼ばひて」とあることを根拠として、川や池に住む鷗もいることを述べている。春満は、『童子問』二五七番歌の注でも、「大池には鷗もより来れる也」と述べていた。

春満の意見をまとめれば次のようになるだろう。まず「海」という語は、古代においては池のことをも指すのであり、当該長歌における「海原」というのは香久山付近にあった大池のことをいっている。またここで歌われている鷗は川や池に棲む種類の鷗であるから不自然ではないと述べ、一首が実景に基づいて詠まれた歌であることを春満は主張した。『宗祇抄』の文飾説に対する実景説の主張である。春満はこの反論のなかで、「いにしへの歌は皆実のみにて、少も虚はなし。今の世の歌に見もせぬさかひをよみ、ありもせぬ景物をよむ類にはあらず」と述べていたが、これは古歌とは見たものをありのままに歌うものなのであって、

虚飾を交えて詠まれたものではない、という春満の古歌理解を示すものであると理解できるだろう

たしかに春満は、三宅氏のいうように、当該歌を実景として解釈し、見たままをありのままに詠うことが、「実」ある歌であることを主張していた。次に、当該長歌を実景として解釈することが今日の研究水準からみて妥当であるかどうか、という点について検討したい。そのことに關しては、実は疑わしいところがある。春満の以降の解釈についてもみていこう。

この歌について真淵は、春満の意見を受け継いで実景説を取り、またこの池について「其（香久山の―引用者注）畝の本につきて二町四方ばかりの池あり。是ぞ古への埴安の池の、これる也」（『万葉考』別記―「天香久山」の項）と卷一（二）・五二番歌にある「埴安の堤」の場所を特定し、当該長歌における「海原」はこの埴安池のことだと述べている。頭注には

或説、大和より海はみえねど、眺望のさまなればのたまへりと云はひが事也。古への歌にそらごととはなし。後の題詠より思誤れる成べし。

と注し、『宗祇抄』に従って文飾説を唱えた旧注の意見を批判し、「古への歌にそらごととはなし」と述べ、春満の主張を

受け継いでいる。春満・真淵以後、近世諸注においては、「海原」を香具山周辺の池のこととする実景的な解釈が広く行われた。新注をみても、澤瀉久孝の『万葉集注釈』や『万葉集全注』（卷一は伊藤博担当）など実景的な解釈を取るものも多いが、中西進の『万葉集全訳注』が「香久山から海は見えない」、多田一臣の『万葉集全解』が「ここは神の眼差しの中に据えられた理想の景がうたわれていると考えるべきである」と述べるなど、実景説に対する批判も少なくない。もちろん、現代の研究成果をもとに近世の研究を批判することはできない。しかし当該歌を実景として解釈することが、実はそう簡単にはいかないものであることがわかる。成立させることの難しい論証を、あえて春満は行おうとしている、ということがここから言えはしないだろうか。

春満や真淵の知見の範囲内であっても、この立論は成立するのだろうか。春満の立論を検証してみよう。春満は二四一番の人麻呂歌と二五七番歌鴨君足人の長歌の二首を証歌として実景説を唱えたが、この二首によって実景説は主張できるのであるか。春満は、古代において「海」の語は池のことをも指すものであって、二番歌という「海原」は眼前にある大池のことを指していると述べて、実景説を

主張していた。だが、「海」の語が大きな池の意味をも含むものであることの証歌として挙げた二四一番歌について、契沖は「これは君の徳をほめたてまつりて、神にてましませばこそ、かゝる山中におもひよらぬ海をばなさせたまへと、池をいかにもおほきよみななされたるなり」（『代匠記』（初稿本））というように解釈していた。「皇は神にしませば」とあるように、天皇は神であるから、山中に文字通りの海を造るという、人為では不可能なことを成し遂げなされた、というのが一首の大意で、ここでは神としての天皇を称賛するために池を誇張して「海」と述べたのだ、というように契沖は解釈している。現代では佐竹昭広氏が、「人為では到底不可能とされているような事柄を眼前に現出してみせた大君の偉業を讃嘆」⁽⁹⁾と述べ、神野富一氏は「大君の威力がうっそうとした荒山中にも海を作るのだという、讃仰の心情がもたらす誇張が働いている」と⁽¹⁰⁾契沖説を支持した解釈を示している。春満は先程引用した『童子問』において二四一番歌の大意を「海成は獵路の池を堀せ給ふことをよめるなるべし。山中に海をなし給ふことを神變の如によみなして天皇を称し奉る歌ときこゆるなり」と注しているが、大王の神性を強調することが一首の主意であるとするれば、大池を作った、というよりも、文字

通りの広大な海を作った、といった方が、一首の主意はより明確になるだろう。確かに「海」の語には、「淡海海」（巻十一・二四三五）などのように湖など大きな水域のことを言う例がある。しかし、だからといって当該歌の場合における「海」の語を、文字通りの海のことを指すものと解してなにか問題があるというわけではない。当該歌の「海」の語を大池のこととして捉える必然性はなく、むしろ文字通りの海のことを指すものと解した方がより主意が明確になるのだとすれば、契沖説の解釈に従う方がより妥当な選択であるとも言える。

また春満が香具山周辺に池があることの証歌として引用していた二五七番歌の本文には「池波立ちて」とあり、二番歌では「海」と歌われたものが、ここでは「池」と歌われている。二五七番歌は左注や配列から考えて初期万葉に属す歌ではなく、二番歌を舒明天皇自身の手にかかるとすれば二首の制作年代は隔たることにはなる。だがこの表現の相違に関してなんらかの説明があつてしかるべきであらう。しかし春満や真淵も特に注釈を施していない。春満の知見の範囲内であつても、春満の立論を批判する余地はあつた。春満の解釈は先行注釈に対する十分な批判、用例の慎重な検討によって立てられたというよりはむ

しろ、古歌は見たものをありのままに詠うものだ、という春満の古歌認識が一首の解釈に先行し、あらかじめ決められた結論に向かって解釈を進めているようにも思われる。

二

次に、春満のこの万葉実景論が、真淵にどのように継承されていったのかを検討する。だがその前にこの二番歌の解釈について、真淵と春満の注釈を比較しておきたい。真淵は春満の解釈に従い、用例も春満と同じものを利用してゐる。真淵は春満の解釈を踏襲しているものの、真淵の注釈に特徴的なこととしては、埴安池の場所を特定したということだろう。このことについて山路平四郎氏は「彼は近頃はやりの実地踏査のはしりのようなことをやった」(傍点原文⁽¹⁾)と書いていた。確かに真淵は詠われた景や物を実際に確認するという作業をよく行い、それは契沖や春満に比して特徴的なことである。

このような傾向についてはもう一つ例を挙げることができさる。「かこじもの」という語についての解釈である。「かこじもの」の語は「秋萩をつま問ふ鹿こそ一つ子二つ子持たりといへ鹿兒^{かこじもの}自物^{かこじもの}我が一人子の草枕旅にし行けば」(巻九・一七九〇)や、「可胡^{かこじもの}自母^{かこじもの}乃^{かこじもの}ただひとりして朝戸出の

悲しき我が子」(巻二十・四四八〇)などの用例があり、真淵はこの語を「一人子」「一人して」を導く枕詞として『冠字考』に立項している。真淵の解釈をみる前に、まずは右に引用した巻九・一七九〇番歌についての『代匠記』(初稿本)の解釈をみてみたい。

ひとつ子ふたつ子とは、あるひはひとつも、ち、あるひはふたつも、つなり。これはひとり子を、彼鹿のひとつ子によそへていはむためなり。鹿兒じもの、鹿の子をかこといふ。麿の字なり。(中略)和名集云。麿(音迷)亦作^レ麿^ニ。しは助語ながら、常の助語のしもじにはたがひて、此しもじはかこといふ物といはむがごとくにて、なくてはかなはぬ字なり。

契沖の解釈によれば、「かこじもの」は鹿の子のような、の意で、一七九〇番歌を訳せば、秋萩を妻として求める鹿は一人子二人子をもっているというが、その鹿の子のようなたった一人の私の子が旅に行くので、の意。契沖は、『和名抄』の記述を引用し、「かこ」は鹿の子の意であることを述べ、鹿が一腹一子であることから、鹿の子のような私の一人子、というようにこの句を解釈している。この語についての春満の解釈はわからない。春満の弟である荷田信名が著した注釈書『万葉童蒙抄』は「宗師案」として春満の説

が引用されるなど、春満の影響を強く受けた注釈書である⁽¹³⁾。この歌の注釈において「宗師案」と記されているわけではなく、はっきりと春満の解釈であると断言できないが、春満の解釈を窺うため、一応引用しておく。信名は契沖同様『和名抄』の記述を引用した後に、「鹿と云ものは、わきて子を愛して、つれて離れぬもの故、よそへて詠めるなるべし」とある。次に真淵の『冠字考』をみると、「こは奥山人に間に、鹿は子一つ二つうむものといへり。然れば子のいとすくなき譬にあげて、人の独子には冠らせたる也」とある。一二匹しかいないという鹿の子のような私の一人子は、というように解釈する点は契沖と変わらないが、特徴的なのはやはり、鹿の生態について山奥に住む者に直接問い、現実の鹿の生態を確かめようとしている点であろう。二番歌における埴安池の調査と同様、ここでも真淵は解釈や自説の補強のために、歌われた物を直接確認している。

三

二番歌の真淵の注釈と、「かこじもの」の解釈から、歌われた物を直接確認しようとする真淵のこだわりを確認できた。ここから春満の万葉実景論が形を変えて真淵に継承されていることがみえてくる。次に「玉藻」という語につい

ての真淵の解釈をみてみよう。

真淵の解釈をみる前に、まずは真淵以前の解釈についてみておきたい。この語について、『代匠記』初稿本に解釈はみえないが、精選本には、一三一番歌「玉藻息津藻」の注に「玉モハ藻ヲホメ、オキツ藻ハ奥ニ有藻ナリ」とあり、また一〇一番歌「玉葛」の注には、「玉ハ玉松・玉椿ナドノ万ノ物ヲホメテ云事多シ」とあつて、契沖は「玉」という接頭語は物を褒める美称だと解している。

次に春満の解釈をみてみる。『僻案抄』には、集中における「玉藻」の初出である巻一・二三番歌、

麻績王流於伊勢国伊良虞島之時人哀傷作歌

打麻うつのを麻績王をみのおほき 海人なるや 伊良虞いらごが島の 玉藻刈

ります

の注には、

珠は物をほむる辞也。此歌にては、あながち、藻をほむべき義にあらねども、只藻とのみいへば俗言也。珠藻といへば歌詞になる也。俗言と歌詞との差別を知るべし。

とある。二三番歌を訳せば、配流された麻績王は海人なのだろうが、伊良虞の島の藻を刈っていらつしやる、というようになる。題詞をみればこの二三番歌は、配流された麻

績王を「哀傷」して、つまり麻績王の境遇を悲しんで詠んだ歌であることがわかる。そうするとこの時の「玉藻」は一見、美しい藻というよりも、海人の刈るような卑しい藻、というように取るべきかとも思われる。この歌の注で春満は、「玉藻」という語を次のように解釈していた。「玉」の語は一般的には物を褒める美称である。この歌においては、必ずしも「藻」を褒めていると取るべきではないが、藻をただ「藻」と言ってしまうのは俗言になってしまう。「玉」を付けることで雅な言葉になり、和歌に詠みこむことができる言葉になるのだと、春満は解している。この歌における「玉藻」の「玉」の語は、「藻」そのものを褒めているというよりは、「藻」という語を和歌に詠み込みうる雅語に変換するための一つの表現手法であると、春満は考えている。春満は「玉藻」を美しい藻と解釈したときに起る、題詞に示された作歌状況との違和感を解消するために右のような解釈を示した。ここでは春満が、ただ「藻」とだけ言った場合、それは「俗言」であると述べていること、つまり藻という植物はそもそも賞美の対象にはならない俗な物であると、述べていることには注意しておきたい。

この語について真淵は次のように言っている。

玉藻の玉をほむる語といふはわろし。玉とほむるも物

にこそよれ。凡草木に玉といふに子こそ多けれ。藻に真の白玉の如き子多きを、豊後の海より持来て見せし人有。
〔万葉考〕卷一（一）・二三

○玉藻とは、藻に玉のごとき子ある故にいふのみ。ほめたる語也といへど、玉もてほむるも物にこそよれ。藻などには似つかぬなり。
〔冠辞考〕「たまよし」

右二つのうち、『万葉考』に即して真淵の解釈をみてみると次のようになる。「玉藻」の「玉」は美称であるなどという説は誤りである。「玉」と美称をつけるのも物による。藻などという物に「玉」という美称をつけるはずはない。草木に「玉」という場合には、実が多い草木を指すものだが、藻に本物の真珠のような実がたくさんついているのを、実際に見たことがあるから、「玉藻」は実の多い藻の意味であると、真淵は説明している。¹³⁾

契沖・春満・真淵は三者とも異なる解釈を示しているものの、春満と真淵は問題意識としては共通している。つまり、美しい物であるはずのない藻に、「玉」という美称が付いているという矛盾、一見文飾とも取れるこの表現をどのように解釈するか、という問題である。

二番歌の解釈において春満は、「いにしへの歌は皆実のみにて、少も虚はなし」と述べていた。古歌は見た物があり

のままに歌うものであってそこに偽りはない、という春満の万葉論にとって、「玉藻」の「玉」を、藻を褒めた美称と解することは、美しくない物を美しく見せるという文飾、古歌における偽りを容認してしまふことにもなるのだから。春満は、「玉藻」の「玉」は藻そのものを褒めているわけではなく、藻を和歌に詠み込む際の一種の方便であると捉え、自身の万葉論と矛盾しない解釈を行っていた。この「玉藻」の語について真淵は春満と異なる解釈を示しているものの、真淵もまた「玉藻」の「玉」を藻についた丸い実のことと解し、藻の外形的な特徴を表現したものと捉えることによって文飾的な解釈を斥けた。さらに真淵の場合、見た物を忠実に表現したものとしてこの語を解釈している点、語の解釈そのものは異なるものの、古歌は見た物をありのままに歌うという春満の万葉実景論を敷衍し、より徹底した解釈を行っていると言える。

真淵のこの解釈は、万葉注釈書のなかでもかなり特異な解釈である。確かに真淵や春満のいうように、二三番歌において「玉藻」を美しい藻と解釈することには違和感を覚えるかもしれない。だが、集中における「玉藻」の用例をみる限りでは、やはり真淵の解釈は成り立ちがたいものであることがわかるだろう。

集中において「玉藻」の語が用いられた例、または「玉藻」という語が用いられずとも藻という植物が詠み込まれた歌は多いが、その中からいくつか例を挙げてみたい。例えば「玉藻」の語が用いられた例としては次のような歌がある。

弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首

夕さらば 潮満ち来なむ 住吉の 浅香の浦に 玉藻

刈りてな (巻二・一二二)

一二一番歌を訳せば、夕になれば潮が満ちてしまうだろう、その前に住江の浅香の浦の玉藻を刈りたい（その藻のような妹に早く逢いたい）、という意味になる。ここでは「玉藻」を刈る、という表現が妹に逢うことの比喩になっていることがわかる。次に藻という植物が詠み込まれた例としては、

藻に寄する

潮満てば 入りぬる磯の 草なれや 見らく少なく

恋ふらくの多き (巻七・一三九四)

という歌が挙げられる。この一三九四番歌を訳せば、あなたは潮が満ちれば海に隠れてしまう磯の草（藻）なのであるだろうか、その姿を見る事は稀で、恋慕う時間ばかりが長い、というようになる。この歌の場合、「玉藻」という語こそ用いられていないが、「磯の草」、つまり藻がここでも愛すべ

き妹の比喩として用いられていることがわかる。二二一番歌において愛すべき妹の比喩として用いられている「玉藻」の語を、「丸い実のついた藻」としてのみ解釈することは難しい。それは「玉のように美しい藻」という意味であるからこそ、愛でるべき美しい妹の比喩として用いられていると考えるのが自然である。一三九四番歌においては「玉」という美称をつけずとも同様の比喩が成立している。ここからは「玉」という美称をわざわざつけずとも、藻という植物は十分美しいものとして認められていたことがわかる。

真淵以後の近世古注をみても、真淵説に従う注釈書は加藤千蔭の『万葉集略解』以外なく、鹿持雅澄の『万葉集古義』は「珠とはほむる辞なり。例多し。藻を称て云るなり。」(岡部氏考に、藻の子の白玉の如くなれば、珠藻といふよしいへるは例の甚偏れり。) (二三番歌) と非難している。確かに二三番歌のみをみるならば、「玉藻」を美しい藻のこととして解釈することは不自然と感じることもあるかもしれない。しかし集中の用例をみる限り、「玉藻」の語は、やはり美しい藻のこととして解釈をしなければならぬ。この一首における「玉藻」の語と題詞との間の矛盾を解消するために、他のすべての用例を「丸い実のついた藻」とし

て解釈することは無理がある。

ではなぜ真淵はこのような偏った説を打ち出したのか。その理由は、次のようなものであった。まず、そもそも藻などというものは賞美の対象となるような物ではないこと、そして、丸い実をつけた藻を実際に見たことがある、という理由からであった。ここで注目したいことは、真淵は実物としての藻の観察結果に基づいて解釈を行っている、という点である。

文飾を否定し、藻の外形的な特徴を正確に表現したものとして「玉藻」の語を解釈する態度は、二番歌における春満の解釈の傾向と合致するものであった。しかしその論証の過程が両者は異なっている。舒明天皇の国見歌の解釈において春満は、「海」の語や香具山周辺の池の用例を収集し、疑う余地は多いものの、それに春満なりの解釈を加えて実景説を立てていた。だが真淵の場合、「玉藻」の用例の収集とその検討に基づいて解釈を行っているというわけではなく、藻には丸い実がついている、という実物の観察によって得られた知見を根拠として解釈を行っている。真淵の場合、実物の観察を通して得られた事実が、文献から導き出される結論よりも重きをなしている、ということがいえないまいだろうか。

解釈の例ではないが、同じようなことが『万葉考』巻一
(二)・一三番歌、大和三山歌の本文校訂においてもいえる
だろう。

○中大兄命の三山の御歌

香山波 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき 神代より
しかなるらし 古も 然なれこそ うつせみも 妻を
相ひ捨つらしき

この歌の初句「香山波」について、寛永版本には
「高山波」とある。仙覚の『万葉集註釈』には、

三山者、畝火、香山、耳梨山也。見風土記。サテ又、
コノ歌古点ニハ、タカヤマハ、クモノネヒヲ、シト、ト
点ゼリ。ソノ心タガヘリ。高山波雲根火雄男志等ト和
スベシ。ウトクトハ、同韻相通也。サレバ高麗ヲ、カ
ノクニノ人ハ、カクリト云フ。シカレバ香山トカキテ
モ、カクヤマトヨム、同事也。

とあり、仙覚が校訂した古写本には「高山」と書いて「タ
カヤマ」と訓附がされていたらしい。それを仙覚は『風土
記』の記述や、「かう」は「かく」に通じる音であることを
述べ、「香山」と書いて「カクヤマ」と読むように、「高山」
の表記であっても「カクヤマ」と訓じうるとして、改訓を
行っている。その際仙覚は文字を改めることまではずせず、

そのため畝傍山や耳梨山よりも低いはずの香具山が「高山」
と表記される状況が続いていた。このような表記と訓の問
題については、『代匠記』（初稿本）は、「かく山を高山とかきて
よむことは、神代より名高き山にて、他の山にことなれば、
義をもてかけり」と述べて、香具山は『伊予国風土記』に、
天上の山が天降った時、その片端が香久山になったとの記
事があるなど、大和三山のなかでも有名な山であったから、
その優位性を表すために「高山」という表記がされている
と、説明している。この句については『僻案抄』には「仙覚、
高の字をかぐとよむ証拠をあげて、かぐやまと云り。風土
記の証明なれば、かぐやまとよむ説しかるべし」とあって、
仙覚の改訓に賛成している。この句について真淵は、「今本
高山と有は誤也。三山の一つは必ず香山にて、外の二山よ
り低ければ高山と書くべからず」と述べて、表記を「香山」
に改めている。他の二つの山よりも低い山である香久山を
「高山」と表記するという、事実とは異なる表記を真淵は
認めていない。当該歌の初句を「香山」と表記している古
写本は、真淵が参照した紀州本などの写本や、それ以外の
ものを含めても全くない。ここで真淵はこの表記と訓の問
題について、古写本の表記を無視してまで改め、事実と表
記との矛盾をなくしている。三山のなかで最も標高の低い

香具山を「高山」と表記するという文飾を否定し、見たものをありのままに、実景的に詠った歌として万葉歌を改めている、という点で、解釈と本文校訂という手段の違いはあるものの二番歌における春満の解釈と、当該歌における真淵の改字は方向性としては合致している。

両者が向かおうとしている結論は共通しているが、ここでも真淵は、香具山は低い、という実体の観察をもとに本文校訂を行っている。文献から導き出される結論としては「高山」という表記が採られるべきであるが、真淵は香具山の観察によって得られた事実に基づいて解釈を行っている。真淵は、実体としての事実を文献よりもより強い根拠として考えている。

四

真淵がこのような解釈を行ったのは、やはり春満の影響が大きいといえるだろう。文献を無視し、実体の観察に基づいて解釈を行うことができるのは、万葉歌とは見た物でありのままに表現する歌であるからだ。見た物がありのままに表現する歌であるからこそ、万葉人が見たであろう景や物を観察した結果を、歌の解釈に取り込むことができる。本稿では、春満が万葉歌を実景的な歌として解釈する傾

向があることを、舒明天皇の国見歌の解釈の検討を通じて指摘した。またそのような春満の考えを受けて、真淵は実体としての事実をもとに「玉藻」の解釈や大和三山歌の本文校訂を行っていることを指摘した。

【注】

- (1) 真淵は『万葉集』の巻次について独特の見解を示し、そのため『万葉考』の巻次は通行本のそれとは大きく異なっている。『万葉考』を引用する際、本稿ではまず『万葉考』における巻次を示した後、○で通行本における巻次を示した。
- (2) 岩波書店、一九三一年。
- (3) 学燈社、一九九三年。
- (4) 『万葉の伝統』、塙書房、一九五七年。
- (5) 『荷田春満の古典学』、私家版、一九八〇年。
- (6) 『僻案抄』や『万葉童蒙抄』は本文と平仮名書きの訓を別に記している。本稿では読みやすさを考慮して、適宜訓に漢字を当てて引用した。以下にある『僻案抄』『万葉童蒙抄』からの引用文も同様。真淵の『万葉考』においても同様に書き下し文にして引用した。なお春満の『万葉集童子問』については訓が付されておらず、また漢字本文も省略されている場合がある。よって『万葉集童子問』の注釈から春

満の訓がわかる場合はそれに従い、不明な場合は寛永版本の付訓に従って書き下した。

(7) 同注5。

(8) 塙書房版『万葉集(本文篇)』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著、一九六三年初版、二〇一二年補訂版九刷)はこの「鴨妻喚」の三字を「かもつまよばひ」と訓じているほか、

現在多くの注釈書が同様の付訓を施している。だが春満や真淵は寛永版本の付訓通り「かもめ」と訓じている。

(9) 佐竹昭広集第一巻『万葉集訓詁』「人麿の反歌一首」意味論的考察―(岩波書店、二〇〇九年。初出は『万葉』一九号、一九五九年)。

(10) 『舒明天皇国見歌攷』『甲南国文』二九号、一九八二年。

(11) 二五七番歌の或本歌である二六〇番歌には「右今案、遷都寧楽_レ之後、恰_レ旧作_二此歌_一歟」との左注があり、二五七番歌から二六〇番歌までの歌群は、平城京遷都後に藤原京の荒廃を悲しんで詠まれたものではないか、と記されている。しかし、この左注の推測には異論も多く、二五七番歌の後に人麻呂の歌や平城京遷都以前に制作されたと思われる歌が載るなど、配列の上から見れば藤原京の時代に作られた

ものとの意見(『新編日本古典文学全集 万葉集(一)』(小島憲之ほか)など)もある。いづれにしても現在の研究では、もちろん初期万葉の時代の歌とは考えられていない。

(12) 『国見の歌二つ』『国文学研究』第二八集、一九六四年。

(13) 『校本万葉集』首巻『万葉集註釈書の研究』(久松潜一担当、岩波書店、一九三一年)。

(14) 他にも真淵は卷二(二)・一三番歌の題詞に見える「玉松」の語について、「老松の葉は^{ツツ}円なるを、玉松といふべし」と述べて、「玉松」の「玉」は松の葉の実物の形状を表したものだと解釈している。

※なお、引用にあたっては春満の『万葉集童子問』は『新編荷田春満全集』(新編荷田春満全集編集委員会編、おうふう、二〇〇三年)から、『万葉集僻案抄』、『万葉童蒙抄』については『荷田春満全集』(官幣大社稲荷神社編、六合書院、一九四四年)から引用した。また真淵の著作については『龍のきみへ賀茂真淵 問ひ答へ』は『賀茂真淵全集』(賀茂百樹増訂、吉川弘文館、一九三二年)から、それ以外は『賀茂真淵全集』(続群書類従完成会、一九九二年)から引用した。